

学生における達成動機と生きがい 及び自己肯定意識の関連

青野明子*

The Relationship between Achievement Motive, Purpose in Life, and Awareness of Self-affirmation in University Students

Akiko Aono*

Abstract

This study examined the relationship between achievement motive, purpose in life, and awareness of self-affirmation in university students. Achievement motive was re-examined and three factors were extracted: self-substantiality achievement motive, social achievement motive, and competition achievement motive. Self-substantiality achievement motive had a positive effect on purpose in life. Also, in awareness of self-affirmation; manner of self-realization, self-reception, sense of fulfillment, self-expression / aggressiveness of the towards others, and awareness of cover evaluation / individual strain increased self-substantiality achievement motive.

Additionally self-reception and awareness of cover evaluation / individual strain increased social achievement motive and self-expression / aggressiveness towards others increased competition achievement motive.

キーワード

達成動機、生きがい、自己肯定意識

Keyword

achievement motive, purpose in life, self-affirmation awareness

*あおの あきこ：大阪国際大学人間科学部准教授〈2008.1.10受理〉

I. 問題と目的

筆者らの研究グループ（注記参照）では、心理臨床の視点による「やる気」の理解とその「しかけ」の開発という目的から、現代学生の「やる気」を理解し、それを促すための方法や手段に関する研究を進めている。「ものごとを最後までやり遂げたい」、「困難なことにも挑戦し、成功させたい」という動機を「達成動機 (achievement motive)」といい、青野・森津（2006）では堀野他（1991）を先行研究として、学生における達成動機と抑うつ、ソーシャル・サポートの関連について検討した。達成動機の測定には達成動機測定尺度（堀野他,1991）を用い、学生における達成動機を構成する側面を再検討し、達成動機のどの側面が抑うつの形成に対して影響を及ぼすのかについて明らかにすることを目的とし、学生における達成動機と抑うつおよびソーシャル・サポートとの関連について検討した。学生における達成動機を構成する側面を再検討し、「個人的達成動機」、「社会的達成動機」、「競争的達成動機」、「挑戦的達成動機」の4因子を抽出した。これらのうち「個人的達成動機」が抑うつの形成に対して負の影響を及ぼすことが示された。さらにソーシャル・サポートについて、きょうだいからのサポートが「個人的達成動機」を高め、友人からのサポートは「社会的達成動機」を低くし、母親からのサポートは「競争的達成動機」を高めることが明らかになった。また、先生からのサポートと父親からのサポートは共に、抑うつを下げる働きをすることが示された。

以上の結果から、学生の「やる気」すなわち達成動機については、他者との比較や社会での評価ではなく、その個人が自身の価値基準でもって打ち込めるものを重視する方向に援助することが、抑うつを防ぐことにつながるという結果が得られた。また、学生が教員からのサポートを期待する度合いは他のサポート源に比べて低いのが、これを上げ、学生にとって教員が「自分を取り巻く重要な他者」の一人となり、「もし何か問題が起こっても援助してもらえると期待」をもたれる信頼関係を築くことは、学生の抑うつを下げることにつながることが示唆された。さらにソーシャル・サポートの受け手側の内的属性として、達成動機の各側面と自己概念や価値観、ライフスタイルとの関連についての研究が、今後の課題とされた。

これらの研究結果に基づき、本研究では達成動機の各側面と自己概念、価値観との関連について、特に生きがいと自己肯定意識に焦点を当てて検討する。生きがいを測る尺度の一つとしてPIL (Purpose in Life) テストがあげられる。考案者のフランクル (Frankl, V.) は、第二次世界大戦中ナチスの強制収容所から奇跡的に生還できたオーストリアの精神医学者である。彼は自身の体験から、人間の動機づけの基本となるものはフロイトのいう快楽原則やアドラーのいう権力への意志というよりは、「意味への意志」であるとした (Frankl, 1969)。すなわち「人生の意味」や「自己存在の意味」を見出し、創造していく欲求や意志こそが、人間の基本的な心性であると考えた。これらは、人生の生きがい感や充実感を作り出そうとする態度、行動と結びつくものであると思われる。

この「意味への意志」が何らかの理由によりうまく機能せず、人生の意味や目的が見出せない時、実存的空虚 (existential vacuum) を感じるとされる。実存的空虚とは心の空しさのことであり、自分の存在が何の意味も持っていないという感情、底なしの意味喪失

感である。実存的空虚には、肉親の死などの突然のアクシデントや挫折によってもたらされる「急性」の実存的空虚と、特に大きな悩みがあるわけではないが、どこか虚しいという「慢性」の実存的空虚があるとされている。これらの実存的空虚をどの程度感じているのか、逆にいえばどの程度、意味・目的意識を持ち、心豊かに生活に張りをもって暮らしているのか、その程度を測定しようと考案されたのがPIL (Purpose in Life) テストである。実存的空虚を測定し、どれだけ生活に虚しい気持ちを感じながら生きているかを調べるということであり、個人がいかに自分の人生を意味あるものとして感じているか、生きがいを感じているかをみるものでもあるといえる。

現代学生の「やる気」の欠如、無気力、無力感、抑うつ傾向については、多くの研究者の指摘するところであるが、それらの結果、フランクルの指摘する生きがい喪失感、実存的空虚感が、現代学生に蔓延しているともいえるだろう。学業のみならず、その他のどんな活動にも熱意をもって取り組むことができずにいる学生が散見されるのが現状である。一方で、学業以外にアルバイト、サークル活動、海外留学など、積極的に行動し、情熱を傾けることのできる学生達もいる。これらの違いはどこにあるのだろうか。前回の研究結果にも示されたように、「やる気」のある学生は周囲のサポートに恵まれ、失敗したとしても誰かが助けてくれる、自分の経験を必ず認めてくれると思えるからこそ、冒険や挑戦ができるということは大きな要因の一つといえよう。

さらなる要因として、「やる気」のある学生は、経験の積み重ねと周囲の他者に受容されることの繰り返しにより自己概念が変化し、自己を肯定的に捉えることが可能になると考えられる。自己肯定意識の研究として平石 (1990a) では、青年期における心理学的健康に着目し、自己意識に存在する健康-不健康、対他者-対自己という2つの軸から分析している。ここでは、臨床事例研究にもとづき広範囲に項目が収集され、自己意識に関する4つの尺度が提出されている。後続の研究 (平石,1990b) では、「自己への態度の望ましさ」である自己肯定性次元を明らかにする目的から、自己肯定意識尺度が作成されている。これは青年期における自己肯定意識の発達のあり方を検討するために作成されたもので、青年期特有の心性を反映させており、自己評価や適応感を測定する尺度の1つとして有効とされている。この自己肯定意識尺度は、対自己領域と対他者領域に二分され、それぞれが3つの下位成分から成立している。対自己領域の下位成分は「自己受容」「自己実現的態度」「充実感」、対他者領域の下位成分は「自己閉鎖性・人間不信」「自己表現・対人間的積極性」「被評価意識・対人緊張」である。これらの因子をもつ自己肯定意識が、さらなる「やる気」を引き出し、ひいては実存的空虚感を解消し、生きがいを感じることに繋がっていくのではないだろうか。

本研究では、心理臨床の視点による「やる気」の理解とその「しかけ」の開発という目的から、堀野他 (1991) を先行研究とし、青野・森津 (2006) に継続する研究として、学生における達成動機と生きがい、自己肯定意識との関連について明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 方法

1. 調査時期 2006年6、7月
2. 被調査者 4年制大学に在学する3、4回生169名。有効データは158名（男性76名、女性82名、平均年齢19.8歳、SD;1.67歳）であった。
3. 質問紙
以下の3種類の質問紙を授業の最後に配布、調査依頼し、その場で回答を求め回収した。

①達成動機測定尺度：（堀野他, 1991）24項目、7件法

他者に勝つことで社会的に評価されることを目指す「競争的達成動機」と、社会的評価基準にはとらわれず自分なりの達成基準への到達を目指す「自己充實的達成動機」の2つの下位尺度、合計からなる。回答は「全然あてはまらない」から「非常によくあてはまる」までの7段階評定（1～7点）で求めた。

②PIL（Purpose-in-Life）テスト日本語版：（岡堂他,1993）Part-A、20項目、7件法

Purpose In Lifeテストとは、実存的欲求不満の程度を測定し、人生の意味・目的をどのように体験しているかを分析的に明らかにするものである。フランクル（Frankl,V.）のロゴセラピーの考え方に基づいて、実存的欲求不満の状況を数量的に測定することを目指して、アメリカのCrumbaugh,J.C.とMaholick,L.T.（1964,1969）によって作成され、岡堂ら（1993）によりPILテスト日本語版とマニュアルが出版された。日本でPILは「実存心理調査」あるいは「生きがいテスト」の名称で紹介されることもあったが、改訂を機会に「PILテスト日本語版」が正式な名称とされた。個人がどの程度、人生の目的を体験できているか、人生に対する空虚感－充実感を測定する質問項目で構成されている。尺度は、5件法によるPart-A、文章完成法による13項目のPart-B、自由記述によるPart-Cの3部構成となっているが、本研究ではPart-Aのみ20項目を使用した（Figure1）。

③自己肯定意識尺度：（平石他, 1990b）42項目、5件法

平石（1990b）によって作成された、青年期の自己意識の発達のうち自己肯定性次元の個人差を測定する尺度。自己肯定意識尺度は、対自己領域と対他者領域に二分され、それぞれが3つの下位成分から成立している。対自己領域の下位成分は「自己受容」「自己実現的態度」「充実感」、対他者領域の下位成分は「自己閉鎖性・人間不信」「自己表現・対人間的積極性」「被評価意識・対人緊張」である。青年期における心理学的健康に注目して作成された尺度であり、項目の内容からも青年期を仮定した尺度として満足いくものであると考えられる。回答は「あてはまらない」から「あてはまる」までの5段階評定（1～5点）で求めた。

Ⅲ. 結果・考察

1.達成動機測定尺度

達成動機尺度（24項目、7件法）に対し因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。共通性の低い項目6項目を除外し、固有値1.00以上の因子を採択した結果、3因子が抽出された。堀野他（1991）、青野・森津（2006）を参考に第Ⅰ因子を、他者・社会の評価にはとらわれず自分なりの達成基準への到達をめざす「自己充實的達成動機（内的整合性としてのCronbachの α 係数は、 $\alpha=.87$ ）」、第Ⅱ因子を、他者をしのぎ、他者との競争に勝つ事で評価されることを目指す「競争的達成動機（ $\alpha=.75$ ）」、第Ⅲ因子を、特に社会的に成功して評価されることを目指す「社会的達成動機（ $\alpha=.74$ ）」とした。

Table1.達成動機測定尺度の因子分析結果

項目内容	I 自己充實的 達成動機	II 社会的 達成動機	III 競争的 達成動機
いろいろなことを学んで自分を高めたい	.776	.051	-.151
いつも何か目標をもっていたい	.712	.052	-.148
難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う	.702	.154	-.148
何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う	.695	-.105	.064
こういうことがしたいなあと思えるとわくわくする	.673	.145	-.114
何でも手がけたことは最善をつくしたい	.620	-.002	.149
決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい	.601	-.151	.148
みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい	.562	-.236	.181
ものごとは他の人よりうまくやりたい	.483	.007	.235
ちょっとした工夫をすることが好きだ	.450	-.130	.217
成功するという事は名誉や地位を得ることだ	-.188	.822	.005
社会で高い地位を目指すことは重要だと思う	.051	.727	-.017
就職する会社は社会で高く評価される場所を選びたい	.015	.575	.193
世に出て成功したいと強く願っている	.410	.433	.063
他人と競争して勝つとうれしい	-.049	.062	.777
競争相手に負けるのはくやしい	-.043	.015	.739
どうしても私は人よりすぐれていたいと思う	.071	.250	.471
因子相関行列	I	II	III
I	1	.370	.537
II		1	.253
III			1

2.自己肯定意識尺度

自己肯定意識尺度（42項目、5件法）に対し因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。共通性の低い項目1項目を除外し、固有値1.00以上の因子を採択した結果、6因子が抽出された。平石他（1990）を参考に、第Ⅰ因子を自己閉鎖性・人間不信（ $\alpha=.92$ ）、第Ⅱ因子を充実感（ $\alpha=.86$ ）、第Ⅲ因子を自己表明・対人的積極性（ $\alpha=.86$ ）、第Ⅳ因子を自己受容（ $\alpha=.78$ ）、第Ⅴ因子を被評価意識・対人緊張（ $\alpha=.81$ ）、第Ⅵ因子を自己實現的態度（ $\alpha=.76$ ）と命名した。

Table2.自己肯定意識尺度の因子分析結果

項目内容	自己閉鎖性	I 人間不信	II 充実感	対人的積極性	III 自己表明	IV 自己受容	V 被評価意識・対人緊張	VI 自己実現的態度
27 他人に対して好意的になれない	.85	-.02	.11	-.09	-.08	-.02		
25 友達と一緒にいてもどこかさびしく悲しい	.84	.09	-.07	-.03	.04	.05		
24 私は人を信用していない	.81	.09	.05	.01	.09	.09		
23 自分は一人ぼっちだと感じる	.80	-.01	.06	.03	.01	-.07		
21 人間関係がわずらわしいと感じている	.70	-.13	.08	.06	.09	-.09		
26 友達と話していても全然通じないので絶望している	.70	-.01	-.07	-.13	-.10	.05		
20 他人との間に壁を作っている	.69	-.02	-.16	.10	-.04	-.04		
19 心から楽しいと思える日がない	.69	-.13	.23	.01	.05	-.09		
22 自分は他人に対して心を閉ざしているような気がする	.61	-.05	-.14	.05	.09	-.10		
14 充実感を感じる	.12	.81	-.03	-.06	-.12	.09		
12 生活がすごく楽しいと感じる	-.18	.78	.02	-.15	.13	-.01		
13 わだかまりがなく、スカッとしている	.03	.76	.02	-.19	-.12	-.10		
15 精神的に楽な気分である	-.07	.63	-.01	.02	-.04	-.28		
16 自分の好きなことがやれていると思う	-.12	.57	.11	.21	.13	-.08		
17 自分のはのびのびと生きていると感じる	-.19	.51	.00	.29	.05	-.25		
7 前向きの姿勢で物事に取り組んでいる	.11	.51	-.03	.21	.04	.23		
18 満足感が持てないR	-.29	.45	-.06	-.21	-.07	.09		
9 張り合いがあり、やる気が出てくる	.04	.43	.09	.22	.04	.16		
30 疑問だと感じたらそれらを堂々とと言える	.15	-.03	.83	.00	-.07	.01		
29 自分の納得のいくまで相手と話し合うようにしている	.01	.12	.81	-.07	.12	-.02		
32 人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことができる	.13	.06	.76	.01	-.09	-.12		
33 人前でもありのままに自分を出せる	-.10	-.03	.69	.01	-.17	.07		
28 相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる	.09	-.13	.65	.07	-.10	.07		
31 友達と真剣に話し合う	-.13	.01	.56	.01	.20	.08		
34 自主的に友人に話しかけていく	-.20	.18	.41	-.05	.08	.07		
4 自分の個性を素直に受け入れている	.07	-.05	-.07	.85	-.13	-.14		
3 自分の良い所も悪い所もありのままに認めることができる	.11	.00	.00	.75	-.05	-.09		
2 私には私なりの人生があってもいいと思う	-.22	-.17	-.02	.63	.09	.02		
8 自分の良い面を一生懸命に伸ばそうとしている	-.01	.09	.02	.52	-.03	.14		
1 自分なりの個性を大切にしている	-.10	-.11	.26	.51	.11	-.03		
36 人に対して、自分のイメージを悪くしないかと恐れている	-.10	-.16	-.06	.08	.80	-.06		
35 人から何か言われぬか、変な目で見られぬかと気にしている	-.12	-.20	.00	.05	.77	-.01		
37 自分が他人の目にどう映るかを意識すると身動きができなくなる	.25	.16	-.05	-.05	.63	-.05		
38 他人に自分の良いイメージだけを印象づけようとしている	.05	.17	.08	-.09	.58	.10		
39 無理してひとに合わせようとして、きゅうくつな思いをする	.30	.11	-.08	-.18	.44	-.01		
41 人に気を使いすぎて疲れる	.20	-.12	-.02	-.09	.41	.11		
11 自分には目標というものがないR	-.19	-.13	-.02	-.14	.02	.90		
10 本当に自分のやりたいことが何なのかわからないR	.00	-.10	.11	-.06	.02	.69		
5 自分の夢を叶えようと意欲に燃えている	.12	.03	-.01	.45	-.04	.48		
6 情熱をもって何かに取り組んでいる	.09	.24	-.11	.30	-.01	.43		
因子相関行列		I	II	III	IV	V	VI	
I		1	-.37	-.29	-.17	.24	.02	
II			1	.37	.37	-.11	.22	
III				1	.42	-.22	.20	
IV					1	-.05	.31	
V						1	.04	
VI							1	

注：Rは逆転項目

3.PILテスト

PILテストについては、原版どおりPartA20項目全体の合計得点を指標として用いることとした。内的整合性としてのCronbachの α 係数は、 $\alpha=.88$ であった (Figure1)。

Part-A **A** 次のそれぞれの文について、あなたにとって最もぴったりと思う番号の数字に○をつけてください。(できるだけ「どちらでもない」にならないようにしてください)。

1	2	3	4	5
私はふだん	私にとって生きることは	生きていくうえで私には	私という人間は	毎日が
退屈しきっている —1	いつも面白くて —7	なんの目標も計画 —1	目的のない全く —1	いつも新鮮で —7
—2	わくわくする —6	もない —2	無意味な存在だ —2	変化に富んでいる —6
—3	—5	—3	—3	—5
どちらでもない —4	どちらでもない —4	どちらでもない —4	どちらでもない —4	どちらでもない —4
—5	—3	—5	—5	—3
非常に元気一杯で —6	—2	非常にはっきりした —6	目的をもった非常に —6	全く変わりばえが —2
はききっている —7	全くつまらない —1	目標や計画がある —7	意味のある存在だ —7	しない —1
1	2	3	4	5
もし出来ることなら	定年退職後(老後)、私は	私は人生の目標の	私の人生には	もし今日死ぬとしたら、
生まれてこなければ —1	前からやりたいと —7	全く何もやって —1	虚しさや絶望しか —1	非常に価値ある人 —7
がよかった —2	思ってきたことを —6	いない —2	ない —2	生だったと思う —6
—3	—5	—3	—3	—5
どちらでもない —4	どちらでもない —4	どちらでもない —4	どちらでもない —4	どちらでもない —4
—5	—3	—5	—5	—3
この生き方を何度 —6	毎日をただ何となく —2	善々と進んできて —6	わくわくするよう —6	全く価値のない —2
でも繰り返したい —7	く過ごすだろう —1	いる —7	なことが一杯ある —7	ものだったと思う —1
6	7	8	9	10
私の人生について	私の生き方から言えば、	私は	どんな生き方を選ぶか	死に対して私は
考えと	世の中は	無責任な人間で	どういうことについて	十分に心の準備が
しばしば自分がなぜ —1	どう生きたいの —1	ある —2	遺伝や環境の影響に —7	出来ており、こわ —6
生きているのかが —2	か全くわからない —2	—3	もがかわらず全く —6	くはない —5
わからなくなる —3	—3	—3	自由な選択ができる —5	—5
どちらでもない —4	どちらでもない —4	どちらでもない —4	どちらでもない —4	どちらでもない —4
—5	—5	—5	—5	—3
今ここにこうして生 —6	非常にじっくり —6	責任のある人間 —6	遺伝や環境に完全に —3	—3
きている理由がいつ —7	ぐる —7	である —7	縛られ、全く選択の —2	心の準備がなく、 —2
もはっきりしている —7	—7	—7	自由がないと思う —1	恐ろしい —1
11	12	13	14	15
私は自殺を	私には人生の意義、目的、	私の人生は	毎日の生活(仕事や	私は人生に
使命感を見出す能力が	十分にある	自分の力で	勉強など)に私は	何の使命も目的も
迷げ道として本気で —1	—7	—7	大きな喜びを見出し、 —7	見出せない —1
考えたことがある —2	—6	—6	また満足している —6	—2
—3	—5	—5	—5	—3
どちらでもない —4	どちらでもない —4	どちらでもない —4	どちらでもない —4	どちらでもない —4
—5	—3	—3	—3	—5
本気で考えたこと —6	ほとんどないと —2	全く私の力の及ば —2	非常に苦痛を感じ、 —2	はっきりとした使 —6
はない —7	思う —1	ない外部の力で動 —1	また退屈している —1	命と目的を見出し —7
16	17	18	19	20

Figure1.PIL (Purpose-in-Life) テスト Part-A 20項目

(佐藤他,1998,『PILテストの全体像と分析法』P.19より)

4 各尺度の相関

Table3.達成動機、生きがい、自己肯定意識各尺度の相関係数

	達成動機 合計	自己充實的 達成動機	競争的 達成動機	社会的 達成動機	生きがい PIL	對自己領域 自己肯定意識	對他者領域 自己肯定意識	自己実現 傾向	自己受容	充実感	自己表明・ 対人的積極性	被評価意識・ 対人緊張
達成動機合計	-											
自己充實的達成動機	.75**	-										
競争的達成動機	.78**	.32**	-									
社会的達成動機	.79**	.55**	.34**	-								
生きがいPIL	.39**	.56**	.20*	.20*	-							
對自己領域自己肯定意識	.41**	.53**	.25**	.22**	.66**	-						
對他者領域自己肯定意識	.28**	.16*	.22**	.27**	-.02	-.02	-					
自己実現傾向	.29**	.37**	.17*	.16*	.44**	.77**	.11	-				
自己受容	.36**	.47**	.19*	.24**	.41**	.71**	.03	.33**	-			
充実感	.25**	.32**	.19*	.08	.58**	.68**	-.19*	.21**	.31**	-		
自己表明・対人的積極性	.34**	.40**	.25**	.15	.42**	.46**	.23**	.24**	.39**	.39**	-	
被評価意識・対人緊張	.23**	.14	.14	.26**	-.05	-.15	.66**	-.01	-.14	-.21**	-.27**	-
人間不信・自己閉鎖性	-.07	-.23**	-.01	.05	-.35**	-.28**	.72**	-.04	-.18*	-.43**	-.29**	.36**

p<.05*, p<.01**

各尺度間及び下位尺度間の関係をみるために相関分析を行った (Table3)。その結果、達成動機の合計得点は、「生きがい (PIL得点)」および、自己肯定意識の「人間不信・自己閉鎖性」を除くすべての下位尺度との間に有意な正の相関が認められた。これらの結果から、達成動機は生きがい及び自己肯定意識と互い関連し合っているといえる。

また、達成動機の合計得点と自己肯定意識尺度の下位尺度との関係では、「自己実現傾向」、「自己受容」、「充実感」及び「自己表明・対人的積極性」との間に有意な正の相関が認められ、「自己充實的達成動機」と「人間不信・自己閉鎖性」との間には、有意な負の相関が認められた。よって「自己実現傾向」、「自己受容」、「充実感」などの對自己領域自己肯定意識および「自己表明・対人的積極性」という對他者領域自己肯定意識が高い場合には、達成動機も高くなり、逆に「人間不信・自己閉鎖性」が高い場合には、特に自己充實的な達成動機は低くなるといえる。

達成動機の下位尺度をみると、「自己充實的達成動機」については、「生きがい (PIL得点)」と「對自己領域自己肯定意識」との間に、他の二つの達成動機より強い相関が認められた。達成動機の中でも特に、他者との比較や社会からの評価に拠らない「自己充實的達成動機」は、生きがいおよび對自己領域自己肯定意識と深く関連していることがうかがわれる。また「競争的達成動機」については、「自己表明・対人的積極性」との間に有意な正の相関が認められ、「社会的達成動機」は「被評価意識・対人緊張」との間に有意な正の相関が認められた。これらの結果から、「自己表明・対人的積極性」が高い場合には、人と競い合って勝ちたいという「競争的達成動機」が高く、また「被評価意識・対人緊張」が高い場合には、社会で認められたいという「社会的達成動機」が高くなることがうかがわれる。

「生きがい (PIL得点)」と自己肯定意識との関係については、「自己実現傾向」、「自己受容」、「充実感」、「自己表明・対人的積極性」と有意な正の相関を、「人間不信・自己閉鎖性」とは有意な負の相関を示した。これらの結果から、「自己実現傾向」、「自己受容」、「充実感」、「自己表明・対人的積極性」が高い場合には、生きがいが高く、「人間不信・自

「自己閉鎖性」が高い場合には、生きがいが低くなることがうかがわれる。

5 各尺度の因果関係

各尺度の因果関係をみるため、共分散構造分析によるパス解析を行った。モデルの適合度は $\chi^2=25.59$ (df=21, n.s.)、GFI=.969、AGFI=.919、RMSEA=.037、AIC=93.594であった。達成動機、生きがい、自己肯定意識の因果関係を説明する有意なパスのみを図に示した(Figure2)。

その結果、達成動機の3因子のうち「自己充實的達成動機」が「生きがい」に対して正の影響を及ぼしていた。「社会的達成動機」、「競争的達成動機」と「生きがい」との間に有意な因果関係は認められなかった。これらの結果から、他者との比較や社会からの評価に拠らない「自己充實的達成動機」は生きがい感を高め、社会からの評価に拠る「社会的達成動機」や、他者との競争に勝つことを目標とする「競争的達成動機」は生きがい感には繋がらないといえる。

達成動機の下位尺度間における関係について、「社会的達成動機」は「自己充實的達成動機」、「競争的達成動機」にそれぞれ正の影響を及ぼしており、「競争的達成動機」と「自己充實的達成動機」との間には有意な因果関係は認められなかった。つまり社会的な評価を目指す「社会的達成動機」を高めることは、結果として「自己充實的達成動機」、「競争的達成動機」とともに高くすることに繋がるといえる。

また達成動機尺度と自己肯定意識尺度の関係について、「自己充實的達成動機」に対しては、対自己領域自己肯定意識の「自己実現的態度」、「自己受容」、「充実感」および對他者領域自己肯定意識の「自己表明・対人的積極性」、「被評価意識・対人緊張」が正の影響を及ぼしていた。また、對他者領域自己肯定意識の「人間不信・自己閉鎖性」は、「自己充實的達成動機」に対して負の影響を及ぼしていた。これらの結果から、自己実現的態度を持ち、自己受容、充実感が高く、他者に対して自己表明ができ、被評価意識、対人的積極性が高いことは「自己充實的達成動機」を高め、「人を信用しない」などの人間不信や、「他人に心を閉ざしている」など自己閉鎖的になる場合には、「自己充實的達成動機」が低くなることが示唆された。

「社会的達成動機」に対しては、対自己領域自己肯定意識の「自己受容」および對他者領域自己肯定意識の「被評価意識・対人緊張」が正の影響を及ぼしていた。「競争的達成動機」に対しては、對他者領域自己肯定意識の「自己表明・対人的積極性」のみが正の影響を及ぼしていた。これらの結果から、自己受容が高く、被評価意識や対人緊張が高い場合には、社会から認められたいという「社会的達成動機」が高くなり、他者に対して自己表明し、対人的積極性が高い場合には、人と競い合って勝ちたいという「競争的達成動機」が高くなることが明らかとなった。

さらに、「生きがい」と自己肯定意識との関係においては、対自己領域の「自己実現傾向」、「充実感」が「生きがい」に対して正の影響を及ぼしていた。「充実感」は達成動機の因子への直接の因果関係は認められなかったが、実存的空虚感を低め、生きがい感を高める影響力があることが示唆されたといえる。

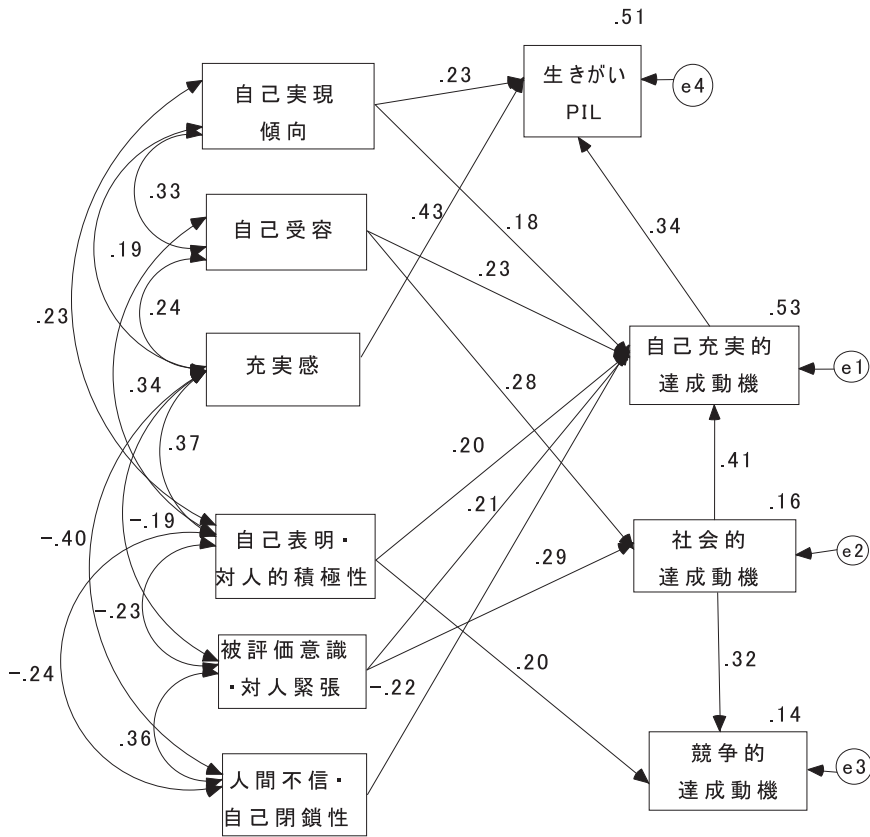


Figure 2パス解析 (有意なパスのみ表示)

IV. 総合的考察

本研究では、学生における達成動機と生きがい及び自己肯定意識との関連について検討した。学生における達成動機を構成する側面を再検討し、「自己充實的達成動機」、「社会的達成動機」、「競争的達成動機」の3因子を抽出した。これらのうち「自己充實的達成動機」が「生きがい」に対して正の影響を及ぼすことが示された。さらに、自己肯定意識について、「自己実現的態度」、「自己受容」、「充実感」および「自己表明・対人的積極性」、「被評価意識・対人緊張」が「自己充實的達成動機」を高め、「自己受容」および「被評価意識・対人緊張」は「社会的達成動機」を高め、「自己表明・対人的積極性」は「競争的達成動機」を高めることが明らかになった。

以上の結果から、学生の「やる気」すなわち達成動機については、その個人が自身の価値基準でもって打ち込めるものを重視する自己充實的な達成動機のみが、学生の生きがい感を高め、実存的空虚感を低めるといえる。従って他者との比較や社会での成功を目標とするように親や周囲の指導者が促し、本人がそのようにやる気をおこしたとしても、学生

学生における達成動機と生きがい及び自己肯定意識の関連

自身の実存的空虚感は解消しにくいことが示唆された。社会的に成功したいという社会的な達成動機は、生きがい感への直接の影響は認められなかったが、自己充実的な達成動機を高めることで間接的な影響力はあることがうかがわれた。また、競争的達成動機は生きがい感とも、それを高める自己充実的な達成動機とも因果関係が認められなかったことから、他者との競争に勝ちたいという達成動機は、学生個人の生きがい感には繋がらないことが示されたといえる。

次に、達成動機と自己肯定意識との関連について、自己実現的態度を持ち、自己受容が高く、他者に対して自己表明ができ、被評価意識をもち、対人的積極性が高いことは、自己充実的な達成動機を高めることが示唆された。従って、学生を指導する場合において、学生の自己実現的態度、自己受容、対人的積極性、被評価意識を高めることができるような方向での指導が、学生のやる気をおこし、生きがい感を高めることにつながるといえる。

これらの結果をもとに、学生を指導するにあたっての留意点を各因子の質問項目などから具体的に挙げると、以下のようなになるだろう。学生個人を指導する場合、学生の対自己領域自己肯定感を高める観点から、学生が目標をもって取り組めるものを模索することをサポートし、各学生の個性を長所、短所を含めて認めることは、学生のやる気を高めることにつながると思われる。また、ゼミ等の学生集団を指導する場合においては、学生の對他者領域自己肯定感と達成動機の観点から、学生の様子をよく見て適切でわかりやすい評価をすること、学生が他者との間で疑問や感じたことを率直に言え、納得のいくまで話し合いができ、ありのままの自分を出せる環境を提供することは、学生の自己肯定意識を高め、やる気を高めることにつながるといえよう。

本研究における達成動機、生きがい、自己肯定意識の因果関係を示すモデルについては、今後さらに検討を重ね、より良好なモデルを提示することが課題であるといえる。また、今回は達成動機と生きがいとの関係について検討したが、先行研究の指摘にもあるように、達成動機の各側面と自己概念や価値観、ライフスタイルとの関連、生きがい感につながる自己充実的な達成動機との間に因果関係のみられた自己実現傾向との関連についても、さらに研究していくことが今後の課題といえよう。

注記：本研究は大阪国際大学平成18年度特別研究助成課題『心理臨床の視点による「やる気」の理解とその「しかけ」の開発に関する研究2』の一部として実施された。この課題に関するプロジェクトメンバーは、森津誠、佐瀬竜一、青野明子である。

謝辞

本調査にご協力いただきました学生の皆様方に深くお礼申し上げます。また、本研究は筆者指導による杉野洋君（平成19年3月、大阪国際大学人間科学部心理コミュニケーション学科卒業）の卒業研究で用いられたデータをもとに、新たな観点を加えて再構成したものです。杉野洋君に対し記して深く謝意を表します。

文献

- 青野・森津 2007 学生における達成動機と抑うつおよびソーシャル・サポートとの関連 大阪国際論叢, 20 (2), 87-97
- Beck,A.T. 1967 *Depression : Clinical,experimental,and theoretical aspects*. Hoebor.
- Bellings,A.G.,Gronkite,R.C.& Moos, R.H. 1983 Social-Environmental factors in uipolar depression: Comparisons of depressed patients and nondepressed controls., *Journal of Abnormal Psychology*, 92, 119-133
- Bell, R.A., Leroy, J.B.& Steohanson, J.B. 1982 Evaluating the mediating effects of social support upon life events and depressive symptoms., *Journal of Community Psychology*, 48, 1562-1571
- Cobb, S. 1976 Social support as a moderator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, 38, 300-314
- Frankl, V. E.1969 *The will to meaning : Foundations and applications of logotherapy*. New York: The New American Library.
- 平石賢二 1990a 青年期における自己意識の構造 - 自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康, 教育心理学研究, 38, 320-329
- 平石賢二 1990b 青年期における自己意識の発達に関する研究 (I) - 自己肯定性次元と自己安定性次元の検討, 名古屋大学教育学部紀要 - 教育心理学科, 37, 217-234
- 平石賢二 1993 青年期における自己意識の発達に関する研究 (II) - 重要な他者からの評価との関連, 名古屋大学教育学部紀要 - 教育心理学科, 40, 99-125
- 平石賢二 2000 青年期後期の親子間コミュニケーションと対人意識 - アイデンティティとの関連, 家族心理学研究, 14, 41-59
- 堀洋道他 2001 心理測定尺度集 I, サイエンス社
- 堀野緑 1987 達成動機の構成概念の再検討 教育心理学研究, 35, 148-154
- 堀野緑・森和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因, 教育心理学研究, 39, 308-315
- 伊藤隆二 1977 よく生きるということ, 柏木新書
- 神谷美恵子 2004 生きがいについて, みすず書房.
- 森津誠 2007 学生のネガティブな反すと劣等感および自尊心との関係, 大阪国際論叢, 20 (2), 63-70
- 諸富祥彦 2004 生きがい発見の心理学, 新潮社
- Murray, H.A. 1938 *Exprorations in Personarity*, Oxford Univ. Press, 外林大作訳 1961 パーソナリティ, 誠信書房
- 大芦治・平井久 1992 学習性無力感に関する帰属理論についての研究, 心理学評論, 35, 2, 175-200
- 佐藤文子 1986 実存心理検査 - PIL - の検討 I 態度スケールを中心に, *Artes Liberales*, No.39, 125-139.
- 佐藤文子 1990 死と自殺に対する態度についての心理学的研究 (2) - 自殺未遂者のPurpose - in-Life-Test (PIL) 反応の分析 -, *Artes Liberales*, No47, 79-92.
- 佐藤文子・田中弘子・斎藤俊一・山口浩・千葉征慶 1998 P.I.L.テストハンドブック, システムパブリカ.
- 佐藤文子・山口浩 1993 PILテスト (実存心理検査) にみられる大学生の生きがい感, 岩手大学・保健管理センター紀要第19号, 5 -16.
- 佐藤文子・山口浩・斎藤俊一・田中弘子・千葉征慶・岡堂哲雄 1993 日本版PILの妥当性, 信頼性の検討, *Artes Liberales*, No52, 85-97.
- 氏原寛他編 1992 心理臨床大事典, 培風館